

お経さまにあう

ご法事にお遇いすると、その場では「によせがもん、むにやむにや…」と何を言っているかわかりにくいかもしれませんが、お経が読誦されます。お経とはお釈迦さまが私たちに説かれた教えが書き留められています。お釈迦さまのお弟子さんたちがお釈迦様の教えとして聞き取った言葉を後の時代文字に書き直したものがお経です。当然のことですが、はじめは昔のインドの言葉、お釈迦さまが使われていた言語で書き表されていました。それを中国の人が、私たちの言葉読みたい、書き表したいと思われ、何度も中国からインドへ經典を取りに行ったり、お経を中国の言葉に翻訳したりするという事業をなさいました。今私たちが目にしているお経様はそれです。日本では漢語をそのまま読み取るということが文化として以前はありましたので、お経が日本語に翻訳されるという事はあまりさせませんでした。しかし漢語に親しむということが無くなった今、お経様が読誦されていても何を言っているかわからない、呪文を称えているようにしか思えなくなってしまっているのです。



法事においてお経を読誦する僧侶は仏様に向かって読んでいますので、一見すると仏様に捧げるものであるように見えますが、そうではありません。お経は仏様から現代を生きる私たちにたむけられているものです。読誦している僧侶も仏様の教えとして聞いているのです。僧侶も、参詣者も共に仏様の教えを聞くという事が形取られているのが法事です。

先祖を供養するためという願いで法事が勤められる場合が多いですが、その場でお経様が読誦されてきた願いを私たちは訪ねていかなければ行けません。お釈迦様の教えを教えとして聴き、相続していく歩み姿勢が何よりも尊いことなのでしょう。お経様を相続して、お釈迦様の教えを教えとして聞き続けていくことが先祖を供養することにつながると考えられてきたことでしょう。

法事を催し先祖の願いを訪ねていくことも法事を催す大切な目的です。自分の思いを先祖に向けていてもあまり意味のないことです。